若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

先生と呼ばれることへの違和感

旭川赤十字病院
楠原（くすはら）　匡（きょう）

初めまして。今春より旭川赤十字病院にて研修をさせていただいている楠原匡と申します。駆け出しのペーペーですが、周りの同期や２年目研修医の先生方、上級医の先生方さらには事務方にも支えられながら充実した研修生活を過ごしております。

この度リレーのバトンをつないでいただいた十良澤太門先生は、大学の同期であり部活の同期でした。昨今のコロナ禍の影響により、最後の東医体は中止となり６年目の集大成とはならなかったのは残念で仕方ありません。また一緒にバスケットができる日々を楽しみにしております。

さて、今回のテーマについてですが題名の通り私自身が４月に入職してから先生と呼ばれるようになり感じる違和感とその責任について述べたいと思います。

今年の３月までは国家試験の問題が解ければ優秀とされていました。机上で問題を解いていただけの人間が４月から患者さんを診察し、処方や検査のオーダーを出し、患者さんに病状説明をし、アドバイスをするようになるのです。急に責任がのし掛かるようになります。これが先生と呼ばれる責任かと思いました。まだまだ独断で判断し、医療行為をすることはもちろん多くはありません。しかし医師として先生と呼ばれ、公的書類にサインをするその行為が責任の重たさを物語っています。

私が先生と呼ばれるようになり、はや５ヵ月が経過しましたが、「先生」という言葉に未だ慣れません。病院のシステムもわからなければ何を処方すれば良いのかもわからず、何もできないのに先生と呼ばれる。そのことに恥ずかしささえ感じることがあります。先生と呼ばれる度、自分の無力さを痛感していました。患者さんからも先生。看護師や薬剤師、事務員さんなどからも先生と呼ばれ、一番の下っ端が先生と呼ばれることにも違和感を感じていました。周りから教えてもらうことの方が圧倒的に多い。私自身からすれば周りの方々の方こそ先生です、と。先生と呼ばれるような知識や技術もなく、先生と呼称されていいのかと思います。早く先生という言葉が似合う社会人にならなければと毎日思っておりました。しかし、そのような時期が来るのはいつでしょうか。研修医が終わったら？　専門医を取ったら？　いつなのかは全くわかりません。その日が来るまで勉強し、修練するほかないのです。自分の中で納得できる日は来るのでしょうか。わかりません。今の私にできることはただ一つ。勘違いしないことです。先生と呼ばれ傲慢になり、患者さんに横柄な態度をとる等、勘違いしないこと。これだけは自分の心の中にとどめておきたいことです。先生という呼称はただ単に習慣の一つでしかありません。そこに特別な意味などない、あるのは社会的な責任のみ。そう思うことで自分の中で折り合いをつけることにしました。そう思うようになれたのはある本がきっかけです。紀伊國屋で見つけた「医師のためのリベラルアーツ」という本です。亀田総合病院の湯浅正太先生の著書です。働き始めて悩む若い医師はとても多いと思います。医師として働くということ、治療・診察するということ、病院で働くということ、命に向き合うということなど感情に触れる医師がものがたりを通して倫理観について考えることができる一冊です。ぜひ手に取ってみてほしいです。

この本には触れられていませんが、先生という言葉はとても便利です。名前がわからなくても先生と呼んでおけば問題ないからです。医師に限らず、教師や弁護士でもそうでしょう。顔と名前を覚えていなくても呼べてしまいます。便利ですが、良いことではありません。私は上級医はもちろん、看護師さんや薬剤師さん、技師さんの顔と名前を覚えるのに毎日必死です。自分の顔と名前を覚えてもらうためにはまず自分からという精神です（笑）。私は他人の顔と名前を覚えるのがとても苦手ですからとても苦労しています。しかも毎月のようにローテが変わり病棟も変わります。しかし、仕事を一緒にする以上名前で呼び合えたほうが気持ちが良いのは確かです。そのためにも研修医室に籠らず、病棟で今日も仕事を探して回ります。顔と名前を覚えるためにも。

末筆になりますが、昨今の新型コロナウイルス感染症により逼迫する医療の中で奮闘される医療関係者の皆様に敬意を表し、次のバトンをつなげたく存じます。